
ハヤテのごとく！アナザーストーリー『レクリエーション』

ヒロインを幸せに

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテの「じとくー」アナザーストーリー『レクリエーション』

【Zコード】

Z4444D

【作者名】

ヒロインを幸せに

【あらすじ】

白皇学院の行事で、遊園地にやってきたハヤテ達。ハヤテ、ナギ、ヒナギク、伊澄など、ハヤテの「じとくー」おなじみのキャラが登場する、『ハヤテの「じとくー』のもうひとつのお話。

第一話・始まつ朝（前書き）

ハヤテの「JULY」の小説をかくなんて夢のよひです。 気楽に読んで
ください。

第一話・始まりの朝

白皇学院では進学する際、クラス替えが行われる。

その後、クラスのレクリエーションをかねて、遠足という行事がある。

だが、遠足といつても、行き先はクラスそれぞれ自由である。国外でもかまわない。

この小説はハヤテの『じとく！』でおなじみのキャラクター登場する『ハヤテの『じとく！』』のもうひとつのお話である。

「う～ん。今日もいい天気だなあ。」

彼の名は綾崎ハヤテ。主人公だ。遠足の日である。

ハヤテ達のクラスでは、日本で有名な遊園地、富士 ハイランドに行くことになっている。

エリート学校としては、以外な展開だ。それには理由があった。理事長の氣まぐれで行き先が制限されたのだ。（かなりいい加減に）なので、遠足を楽しみにしている生徒はそう多くはなかつた。だが、ハヤテは楽しみのようだ。富士 ハイランドなど生まれて初めてなので、ワクワクしていた。

「楽しみだなあ。」

「ふふつ、ハヤテ君たら、まるで小学生みたいですね。」

彼女の名はマリア。三千院家のメイドだ。ピチピチの17歳である。「マリアさん。いやあ、まさか富士 にいけるとは思わなかつたものですから。」

「確かに、国内というのは珍しいですねえ。パリやシドニーへ行くのは聞いたことがありますけど。」

もはや遠足とか関係ないなあと思うハヤテであった。

「あ、そろそろお嬢様を起こさないと。」

お嬢様の部屋にむかうハヤテ。

コンコン

「お嬢様。朝ですよ。起きて下さーい。」
ガチャ

「もう起きておる。」

部屋からでてきた彼女の名は三千院ナギ。三千院家の一人娘だ。八
ヤテのことが好き。ハヤテ

「お、お嬢様。一人で起きたんですか？」

「バカモノ。私だって一年に一度は自分で起きる。」

どうりアクションをとればいいかわからないハヤテ。

「今日は遠足ですね、お嬢様。」

「ん？ああそうだな。」ハヤテ

「楽しみですね。」

「あ、ああ、そうだな。」

頬をあかくするナギ。

ナギ『ハヤテと一緒に遊園地なんて、デートみたいだ。』

本来なら、ナギは遊園地に興味を示さないが、ハヤテが一緒なので、
遠足を楽しみにしていたようだ。

第一話・始まりの朝2

ハヤテとナギは白皇学院へ向かっていた。いつもの道を一人並んで歩いていた。

「新学期になつて、もうすぐ一ヶ月ですね。」

「ふむ、そうだな。」

「クラス替えがありましたけど、馴染みのある人達が一緒でしたね。伊澄さん、ワタル君、瀬川さん、花菱さん、朝風さん。すごい偶然ですね。」

それがこの小説のお約束。ついこいんだら負けです。

「それにまさかヒナギクさんとも一緒にクラスになるなんて思いましたよ。」

この一言がナギの逆鱗に触れた。

「おい、ハヤテ。ヒナギクと一緒にクラスになれてそんなにうれしいか!?」

「はい。」

二パーと笑顔で言った。

火に油だ。

「ハ～ヤ～テ！！なにがヒナギクだ！私と一緒にクラスではうれしくないというのか！」

ATフィール　が発生していた。いや無　の境地のオーラか。とてもない殺氣に満ち溢れるナギ。

「お、お嬢様！？」

大ピンチな主人公。その時ナギの後ろから、

「あなたたち、朝っぱらから何やつてるの？」

救いの女神登場。彼女は桂ヒナギク。頭脳明晰、スポーツ万能。だけど高所恐怖症。ハヤテに対して好意を抱いている。

「あ、おはようございます、ヒナギクさん！」

「おはよう。ハヤテ君。ナギ。」

ヒナギクをじーつと見るナギ。

「ふんつだ！」

ヒナギクに挨拶をかえさずに先に行くナギ。

「！？ 何かあつたの？」

疑問に思つたヒナギク。

「さあ？ 僕にもさつぱりです。」

主人公は天然なので、『』で承ください。

そんなこんなで学院に到着。クラスのほとんどが集合していた。

「ぎりぎりでしたね。」

「…ああ、そうだな。」

『機嫌ななめなナギ。』

「もう。さつきから不満そうね。」

呆れるヒナギク。

「だれかさんのせいでな。」

小声で言つナギ。

そんなことも気にせず、ハヤテはふっと氣付いた。

「そういうえば、ヒナギクさんが時間ぎりぎりに来るなんて珍しいですね。」

ギクッギクッ

「わ、私だつて、寝坊ぐらにするわよー！」

ハヤテは感づいた。ヒナギクさんは子供っぽいところがあるから、遠足（遊園地）が楽しみで、眠れなかつたのだろうと、ハヤテは思つた。そんなヒナギクをカワイイと思、思わずクスッと笑うハヤテ。

「あ！ ハヤテ君！ 今笑つたでしょ！」

「い、いいえ、全然…。」

「いいえ！ 絶対笑つてた！」

ラブコメつてる二人。そんな二人を見て、ますます不機嫌になるナギ。

「ハヤテ！ 向こうに行くぞ！」

「あ、待つてください、お嬢様。それじゃあ、ヒナギクさん、また

…。」

ナギを追いかけるハヤテ。

「あ、ちょっと、ハヤテ君？」

残念がるヒナギク。

『もうちょっと一緒にいてもいいのに…。』

そんな風に思つたヒナギク。そんなヒナギクを見て、「見てごらん、泉。好きな人ともっと一緒にいたかったと悔いでいる人だよ。」

「恋する乙女つて感じだねえ。」

生徒会三人組、泉、美希、理沙、登場。

「な！なにを…。」

「…心配ない！誰にも言わん！」

ハモつた三人。

「だーかーらー！違うつて言つてるでしょーーー！」

キヤーキヤーツ

四人のオーラッコがはじました。

第三話・始まりの朝 3

-前回までのあらすじ-

ハヤテとヒナギクがラブラブだったのだ！！

ハヤテとナギはワタルのところへ向かった。

「おはようございます、ワタル君。」

「よー！ハヤテ！ナギ！」

彼は橘ワタル。ナギの許婚つことになつてゐる。だけビワタルは伊澄が好き。

「…で？その伊澄はどこなんだ？ワタル。」

ナギがワタルに問い合わせた。

「いや、今日はまだみてねえよ。」

その時ハヤテ、ナギ、ワタルは思つた。

『『『まさか…また迷子？』』』

そう、伊澄はスーパー方向音痴。本編に無事出て来るかもわからな
いのだ！

「ま、まあ、もしかしたら来るかもしませんし…」

ハヤテがそう言つても、

「「それはない。」」

ナギとワタルははつきり言つた。しかしハヤテもフォローのしよう
がなかつた。

「で、でも、お嬢様や伊澄さんは、自宅に遊園地があるので、別に
今日来れなくても…」

「ああ、でも私はあのクソジジイ（ナギの祖父）のせいでまともに
遊びんし、伊澄はいつも迷子になつてるからな…」

狙いすましたかのようなお約束であつた。ハヤテも納得するしかな
かつた。

集合時間になつた。ハヤテ達の担任である桂雪路が点呼を始める…。

『先生が時間内にいる…』

生徒全員がそう思つた。無理もない。ダメ人間である雪路が集合時間を見守つて、教師の仕事をちゃんととしている。

ハヤテ

「桂先生が集合時間を守るなんて…」

ナギ

「地球が滅びるんじゃないか？アル ゲドンとかで…」

ワタル

「デス ロン軍が地球に攻めてくるじゃないか？」

そこに生徒会三人組が加わり、

泉

「桂ちゃん、何かあつたのかな？」

美希

「雪でも降るんじゃないか？」

「いやいや、槍が降つてくるかもしけんぞ？」

理沙

…とまあ、みんないろいろ心配しているが、実はヒナギクが雪路を電話で起こしていただけだった。

雪路

「伊澄さんだけ、欠席ね。」

ハヤテ、ナギ、ワタル

『やつぱり…』

読者のみなさん、伊澄が出て来るよう祈つていってください。

雪路

「そんじや、移動するよーー！」

ハヤテは思った。富士 までどうやって移動するのかと。

ハヤテ

「やついえば、何で移動するんですかね。」

ナギ

「そりゃあ、普通バスに決まってるだろ。」

ハヤテ

「や、ですか…ですよね…」

ハヤテのこの手のことに關しては外れた事のない直感が告げていた。（「ミツクス2巻参照）ナギお嬢様の言つ普通といふのは、ハヤテにとっては絶対普通ではないと。

少し移動すると、普通のバスが止まっていた……

……普通？

そんなんはずがない。それが世界の決まり事。
二階建てバス。しかも飛行機のファーストクラス顔負けの豪華さで
ある。

ハヤテ

「ハハハ…なんかこういつの慣れてきたなあ…」

雪路

「よしそーはいみんな乗った、乗ったーー！」

雪路の言われるままにクラス全員バスに乗った。

雪路

「みんな乗ったね。よしーじゃあ出発ー！」

いつもの雪路だ。

泉

「桂ちゃん絶好調だね。」

美希

「ああ、こうでなければおもしろくない。」

理沙

「向こうに着いてからもおもしろそうだ。」

生徒会三人組はワクワクだった。

一方その頃、三千院家のお屋敷では、

マリア

「はあ…。なんかつまらないですねえ。屋敷に誰もいないですしね。」

「

(クラウスは?)

そんなマリアだけしかいないお屋敷に一人の訪問者が現れた。

咲夜

「ナギー！遊びに来たつたでーーー！」

咲夜登場。彼女はナギの幼なじみ。

マリア

「咲夜さん、こんにちは。ナギは今日遠足でいないんですよ。」

咲夜

「そりなん？あちやー。うちの高校今日休みやつたから來たんやけどなあーーー。」

咲夜はしょんぼりとした。

マリア

「せっかくですし、お茶でも飲んでいきません?」

咲夜

「あ、じゃあ、頼むわあ。邪魔するでえ。」

滅多に見ないシャツフルコニット登場。

第二話・始まりの朝3（後書き）

次回、他のシャッフルユニット登場です。

第四話・組分け

前回までのあらすじ

やつと出発しました。

富士に着いた。

ちなみにバスの中で起きたことは、読者の方々の「」想像におまかせします。

ハヤテ

「やつと着きましたね、お嬢様。」

ナギ

「ああ、バスの中はうるそくてかなわん。」

ナギは疲労気味な顔で言つた。

当然だ。雪路と生徒会三人組が大騒ぎだつたからだ。

ヒナギク

「もう、お姉ちゃんたら…」

千桜

「まあ、仕方ないですね。」

愛歌

「そうですね。」

春風千桜と霞愛歌、やつと登場。第四話でやつと…

さて、やつと遊園地に着いたことですし、みんなで遊びまく〜…
かとおもこきや、

雪路

「はーいーじゃあ、組分けするわよーー！」

生徒全員

『ーー?』

生徒達が驚くのを見て雪路は、

雪路

「あれ？ 言つてなかつた？ 今日は一人一組で行動するから、遊園地
に着いたらくじ引きするつて…」

ヒナギク

「聞いてないわよーお姉ちゃんー！」

生徒達がざわめき始めた。

雪路

「はいはい、静かに、静かにー言つてなかつたは謝るわ……ってな
わけでくじ引きはじめーー！」

切り替えはやー！

とこつわけで、組分けスタート！

雪路

「じゃあ、綾崎君からね。」

ちなみに名簿順（アイウエオ順）ではなく、作者の都合による順番でくじ引きをやつます。

ハヤテ

「はい。」

くじのある箱の中にハヤテは手をいれた。

ゴソッゴソッ

ハヤテ

「あ、ちなみに桂先生。お嬢様の執事としてつてことで、お嬢様とペアになるなんてこと……」

雪路

「だめ。」

ハヤテ

「ですよね。」

それを聞いたナギが陰で、

ナギ

『ちつー。』

ゴソッゴソッ…バツ！

くじをひいた。番号が書いてある。

ハヤテ

「1番ですね。」

雪路

「はい、綾崎君は1番ね。」

くじをひき終わると、ハヤテはナギのところへ戻った。

ナギ

「おまえ、誕生日が十一月十一日だからって、そんなに1という数字が好きなのか？」

ハヤテ

「いや僕、狙つてゐわけじゃありませんよ。」

雪路

「はい、じゃあ次、瀬川さん。」

泉

「はーい！」

ゴソッゴソッ…バッ！

泉

「えっとね、5番…」

雪路

「5番ね。次、花菱さん。」

美希

「はい。」

ゴソッゴソッ…バッ！

花菱

「…5番だ。」

雪路

「花菱さん、5番つと。次朝風さん。」

もうハヤヒとの読者のひとはおわかりでしょ♪。

『ゴソッゴソッ…バッ！

理沙

「…5番。」

この結果に、生徒会三人組は雪路にあたつた。

泉・美希・理沙

「…なんで…?—一人一組じゃないの?」

雪路

「だつてこのほうが楽だし。けど、確かに5番は三つ用意したけど、あんた達が見事に引き当てるとな…」

「ううん、だら負けです。

雪路

「まあ、気をとりなおして、次、春風さん。」千桜
「はい。」

『ゴソッゴソッ…バツ！

千桜

「8番です。」

雪路

「8番ね。次靈さん。」

愛歌

「はい。」

『ゴソッゴソッ…バツ！

愛歌

「8番です。」

雪路

「靈さんも8番ね。じゃあ春風さんと靈がペアね。」

愛歌

「よろしくね、ハ・ル・さ・ん！」

パリーンツ

千桜の眼鏡が割れた。マンガではお決まりのリアクションだ。

千桜

「ちょ、ちょ、あやたはや……」

完全にクールとかではなくなっていた。

愛歌

「冗談です。」

顔が完全に悪魔と化していた。

千桜はそれを軽くひいていた。

とまあこんな流れで、くじ引きは続いた。

次回につづく。

場面がかわって、三千院家お屋敷に…

咲夜

「あー、暇やなあー。」

マリア

「ですねえ、ハヤテ君がいないと仕事の進みが悪くて……」

それを聞いて、咲夜がおもしろい事を思いつく。

咲夜

「なあ、マリアさんって一歳やつたなあ？」

マリアがいつもより敏感に反応した。

マリア

「え、ええ、そうですが、それが何か？」

咲夜

「いやあ、マリアさんもええ歳やし、好きな人とかあるんぢゃうかなーって思てな……そ、例えば、ハヤテとか……」

マリアは激しく動搖した。

マリア

「な、何言つてるんですか、さ、咲夜さん！ハヤテは、そのかわいげのある弟という感じで……」

マリアは顔を真っ赤にしてじぶんじぶん言つた。

咲夜

『あちやー。これじゃ好きか嫌いかわからへんわ。』

咲夜はあきれっていた。

マリア

「そ、そうですね。私達も遊園地に行ってみましょう。」

話題を変えたマリア。

咲夜

「お、ええなそれ。ほなさつそく、巻田！国枝！」

巻田、国枝、ヘリコプターで登場

こうして二人も遊園地へ向かった。

第四話・組分け（後書き）

感想待つてます。

第五話・それぞれの思惑

前回までのあらすじ

遊園地に着いたハヤテ達。そして、今日行動をともにするパートナーを決めることになった。

クラスの半分がくじを引き終わった。知っている人と一緒になつたり、初めて会話をするような人と一緒になつたりと、結果は様々だつた。

雪路

「えっと、次はヒナね。」

ヒナギク
「はい。」

ヒナギク

『まだハヤテ君のペアは決まってない・・・』 そう、ヒナギクはハヤテのことが好き。できれば一緒にペアになりたい、ヒナギクそう思つた。

ヒナギク

『もし、ハヤテ君と一緒になら・・・』

彼女の想像はどんどん膨らんでいった。考えれば考えるほど彼女の顔は赤くなつた。

雪路

「ヒナ、どしたの？」

現実に戻るヒナギク。

ヒナギク

「ほえ！？あ、ごめん、お姉ちゃん・・・」

そして、ヒナギクの顔付きが変わつた。

ヒナギク

『なんにしても、ハヤテ君と同じ番号を引かなければ・・・』

ヒナギクの目が燃えていた。

わたしのこの手が真っ赤に燃える！！！
1番を掴めと轟き叫ぶ！！

雪路

「ヒ、ヒナの手が、か、輝いている・・・」

灼熱（しゃくつ）！ゴッ フイ ガー！！！

注意・・・

ヒナギクは決してオタクではありません。作者の都合です。

ゴソッゴソッゴソッ！

バツ！

引いたくじを高々と挙げるヒナギク。そして、ヒナギクが引いた番号は・・・

『ハズレ』

ヒナギクは愕然とした。本来、数字がかいてあるはずのくじに『ハズレ』とかいてあつたのだから。いや、愕然というより呆れていた。

ヒナギク
「力ぬけるわあ・・・」

雪路

「お、ヒナが引いたわね。アッハハ！…こやあ、ふれけ半分でやつてみたんだけど…・・でも大丈夫よ。ちやんと雪路を直しからうて…・・ヒナ？」

ヒナギク

「おーねーえーちやーんー！…？」

ギヤーッ（雪路）

他の生徒達はア然としていた。

ちなみに雪路がどうなったかは読者の方々におまかせします。

雪路

「えー、ぱー、びをぼびぼび（えー、じやあ）をとつなおして）・・・」

ヒナギク

「まつたく、お姉ちゃんはホントにまつたくー。」

あらためて、気合を入れ直し、ぐじをひくヒナギク。

「ゴソッゴソッ・・・バツ！」

ヒナギク

『お願い・・・』

ヒナギクが引いた番号は・・・11番！

・・・おしい！

ヒナギクはがっかりした。この状況、ハヤテが白皇の試験を受けたときの一の舞だ。

ハヤテ

「ヒナギクさん、何かがっかりしてましたね？何かあつたんでしょうか？」

ナギ

「さあ、姉の相手で疲れたんじゃないかな？」

そして、くじ引きは残りあと二人。その二人とは、ナギ、ワタルだつた。

「あと一人ね。はい、じゃあ、ナギちゃんの番よ。み

ナギ

「はい。」

ナギの顔は自信に満ち溢れていた。

ナギ

『いまだにまだハヤテのペアは決まっていない・・・フツ、やはりハヤテと私、どこに行こうとラブライブに結ばれる運命なのだな!』

ナギはくじの箱のなかに手をいれ、すぐくじを引き出した。

見るがいい!私とハヤテの絆をー!

・・・11番・・・

ナギ

「・・・つむなこーー?」

雪路

「はー、ナギちゃんは11番ね。ヒナとペアね。」

ナギはこの結果が気にいらなかつた。

ナギ

「嘘だ！私とハヤテは結ばれる運命のはず！なんでヒナギクなんか
と！」

ヒナギク

「な！なんですって！」

二人は険悪なムードになつてきた。

そんな一人を無視して、雪路は進行を進めた。

雪路

「じゃあ、次・・・ん？」

バババババババッ！！！

急にヘリコプターがおりてきた。

そしてヘリコプターからおりてきたのは・・・

「遅れてすいません。」

伊澄登場！奇跡！

ナギ・ワタル

「伊澄！」

ハヤテ

「伊澄さん！」

三人は伊澄のところへ向かった。

ナギ

「伊澄。よくたどり着いたな。」

伊澄

「心配をかけてごめんなさい。」

ハヤテ

「へりで来たのに、どうして遅れたんですか？」

伊澄

「実は、学院に歩いていくうちに迷子になってしまって・・・そして結局、執事の方々に拾われて來たの。」

期待通りのパターン・・・

雪路

「伊澄さん、よく来たわね。けどくじは最後よ。」

伊澄

「くじ?」

ナギ

「ああ、実は・・・」

説明省略。

伊澄

「なるほど。じゃあ私はワタル君のあとくじをひけばいいのね。」

ワタル

「あ、ああ。」

雪路

「はー、じゃあ橋筋。くじ引いてみよう。」

するとワタルは雪路にいってそり耳打ちした。

ワタル

「先生、あと組つてこくつづですか?」

雪路

「安心なさい。まだ出てないくじの中にはまだ出てない組の番号もあるわ。」

ワタルは決意した。なんとしても、新しい番号のくじをひくと…。

ワタルは息をのみ、箱に手をいれた。

ゴソッゴソッ！バツ！

引いた番号は・・・9番！まだでていなイ番号だ！

やつた！

ワタルは小さくガツツポーズをした。

しかし、ワタルは気付いた。あとくじを引いていないのは伊澄だけ。まだペアが決まっていないのはハヤテとワタルの一組。

一人足りない。

ワタルがそんなことを気にしていると、伊澄がくじを引いていた。

ワタル

「ちょっ、伊澄！」

「ソッソッ…バツ！

伊澄引いた番号は…。

1番！

雪路

「はい、伊澄さんが1番だから、綾崎君とペアね。」

伊澄がハヤテに近づき、

伊澄

「ハヤテ様。今日一日、よろしくおねがいします。」

ハヤテ

「はい。いらっしゃい。」

無事にペアが決まった…ってワタルは？

ワタル

「あのー先生？俺は？」

雪路

「あー仕方ないからアタシとペアね。」

ワタルはどうリアクションをとればいいか迷っていた。

かわいそつこ・・・

第五話・それぞれの思惑（後書き）

感想待つてます。

第六話・テート&ストーキング（前書き）

注意・・・」の作品に「」である富士 は実際のものとは異なるので、「」承
知ください。

第六話・デート&ストーキング

無事？ ペアが決まったハヤテ達一行。

ここでペアのおさらい

ペア1：ハヤテ・伊澄

ペア5：泉・美希・理沙
ペア8：愛歌・千桜
ペア9：ワタル・雪路

ペア11：ナギ・ヒナギク

などなど・・・

雪路

「それじゃ、それぞれ行動開始してーー！」

雪路の指示と同時にクラスみんなが動き出す。

泉

「何に乗ろつかー？」

美希

「やはりジョット」「ースターだな！」

理沙

「並ぶの面倒くさい！」

こんな感じでみんな動いているが、ナギとヒナギクはまだ入口近くにいた。

ナギが動こうとしないのだ。

ヒナギク

「ちょっと、ナギ！ みんな行っちゃったわよー。私達もさつさと行かない」と

39

ヒナギクは呆れながら言った。彼女からみても、ナギが『機嫌斜めなのはわかつた。

ナギ

「ふんだつ！ なんでヒナギクなんかと一緒に遊園地で遊ばなければならんのだー！」

ナギはハヤテと一緒にすることがまだ不満のようだ。まあ、それが好きな人なら尚更だ。

ヒナギク

「な、なんですってーーー！ 私だってナギなんかよりハヤテ君と一緒に

のペアがよかつたわよ。」

つい言ってしまった。これではヒナギクはハヤテに好意をいだいていると言つていいようなものだ。

ヒナギクはハツと思い、自分の言った事を考えると恥ずかしかった。
ナギ
「なにー！？おまえもハヤテをねりつているのか？ハヤテは私のも
のだ！」

ヒナギク
「い、いや、そういう意味じゃなくてね……」

あたふたするヒナギク。とりあえず「まかそうとするヒナギクだが、
ナギはまったく聞こえとしなかった。

ナギ
「だいたいハヤテと私は……ん？」

急にナギの様子が変わった。それを疑問におもつたヒナギクは、

ヒナギク

「どうしたの？ナギ……」

ナギとヒナギク。二人が見た衝撃の瞬間……

なんとハヤテと伊澄が手を繋いで歩いているではないか！

ナギ・ヒナギク

「「つて何ーー!?」」

一人は戸惑った。ハヤテと伊澄が仲良く手を繋いで歩いる。言いかえれば、好きな人が他の女の子と手を繋いで歩いている。

ナギ

『ハヤテめー！私と一緒にじゃないからって伊澄に手をだすとはーー!』

ヒナギク

『ハヤテ君つたらちつぱり女の子にだらしないわねーそのつい年下なんてー!』

それぞれ心中異なるが、ハヤテに対する怒りは同じだった。

ナギ・ヒナギク

『許さんーー!』

一人の周りにダークサードが広がっていた。

何故ハヤテと伊澄が手を繋いでいるかというと・・・

数分前

ハヤテ

「伊澄さん、最初にどこに行きますか？」

伊澄

「遊園地ではあまり遊んだことないので・・・よくわかりません。」

『伊澄はいつも迷子になつてゐるからなあ・・・』

ハヤテは田をうるおんだ。方向音痴の人をここまで哀れんだことはない。

善人である主人公・ハヤテは、

ハヤテ

「伊澄さん。」

ハヤテの改まつた態度に伊澄は首を傾げた。

伊澄

「はい？」

ハヤテは伊澄に手をさしのべた。

ハヤテ

「今日一日、僕と手を繋いで行動しましょう。そうすれば迷子になりません。」

伊澄は顔を真っ赤にして、戸惑った。

伊澄

「えっ、あ、あの、そ・・・」

オロオロしている伊澄の手を無理矢理取り、ハヤテは言った。

ハヤテ

「さあ、行きましょう伊澄さん。今日一日をたのしみましょう。」

伊澄

「え、ちょっと……」

こうしてハヤテ・伊澄の二人は歩きだした。

そんな二人の思惑とは裏腹に、ナギとヒナギクは誤解していた。

ナギ

「ハーハーテー！ いくぞヒナギク！ あの二人を追いかけるぞ！」

ヒナギク

「ええ！」

ナギ・ヒナギクも行動を開始した。

そんな女の子一人の誤解にまったく気付かないハヤテ。いや、気付くはずがない。天然かつ鈍感だから。

少し歩くとハヤテ・伊澄の一人はアトラクションの一つを見つけた。
メリーゴーランドだ。

ハヤテ

「伊澄さん。まずはあれに乗りましょう。」

伊澄

「・・・」

伊澄は沈黙していた。顔が赤く、顔からゆげがでている。

ハヤテ

「伊澄さん?」

伊澄

「あ、あの、ハヤテ様・・・そ、その・・・やっぱり手を・・・」

ハヤテ

「？ なんですか？」

ドンカンッドンカンッ（鈍感鈍感）（学校のチャイム風に）

ハヤテ

「そんなことより、はやく乗りますわ。」

強引に伊澄の手をひくハヤテ。

伊澄

『もつ・・・ハヤテ様つたら・・・』

そんなラブな二人を遠くから見ているナギ・ヒナギク。

ナギ

『ハヤテのやつー！ 妙に積極的だな。』

ヒナギク

『ハヤテ君つたら、年下に手をだすなんて・・・やっぱり口コロコロしながらしらっ。』

こんなことを考えながら、ハヤテ・伊澄をストーキングするナギ・ヒナギクだった。

そして、上陸からヘリコプターでハヤテやナギ達を見ている人達が・

マリア
「・・・まあ、JGなんことになつてゐとは思つてましたけど・・・」

双眼鏡みたいな機械スコープで見ながらマリアはつぶやいた。

咲夜

「まつたくやな・・・」

マリア

「ハヤテ君も大胆ですねえ・・・伊澄さんの手を繋ぐなんて・・・さすが天然ジゴロ・・・」

咲夜

「ま、このままやとハヤテはナギの制裁をつけたことになるわなあ・

・

マコア
「こつもと回じつて」とですね。

「

咲夜

「それもやせなー。」

アハハツ・・・

咲夜

「・・・つてわいら出番これだけかいーー！」

マリア

「小説でも私の出番少ないんですねか・・・」

第六話・データ&ストーキング（後書き）

感想待つてます。

第七話・それぞれのグループにて

メリーゴーランドに乗り終わったハヤテと伊澄は、一段落つじうと、ベンチに座っていた。

もちろんそんな二人をストーキングしているナギとヒナギクは少し離れた場所から監視していた。

ハヤテ

「疲れましたか？伊澄さん。何かお飲みものでも買いに行きましょうか？」

伊澄

「え、私は別に・・・それにハヤテ様が一人で買いに行つた方がはやいでしうに・・・」

ハヤテ

「そりかもしれませんが、伊澄さんを一人にするわけにはいかないので・・・さあ、行きましょう！」

ハヤテは立ち上がり、伊澄の手を引いた。

伊澄

「・・・はい。」

伊澄も開き直ったのか、笑顔で一緒にむかつた。

それを遠くから監視するナギとヒナギクはさうに、ダークサードを広げていた。

ナギ

『まったく！ ハヤテは本当にまったくー伊澄とあんなにほしゃがおつて！』

ヒナギク

『なによもう！ ハヤテ君ったらーずっと手なんか握つたりやつて！』

ここでヒナギクは少し冷静になつて気付いた。自分が今していること、これはストーキングなのでは・・・自分のしていることが恥ずかしく思ったヒナギクは、

ヒナギク

「ナギ。私達遊園地で遊ぶためにここに来たのよね？」

それを聞いたナギも少し冷静になり、

ナギ

「それがどうした？」

ヒナギク

「だつたら私達も楽しみましょ！」

ナギは膨れつ面で言つた。ナギ

「ふんだ！そんなことより私のハヤテが伊澄に余計なことをしない
ように見届けなければ・・・」

ヒナギクも気になつてゐる。好きな人が他の女の子と楽しんでいる
のを見て、落ち着いていられるはずがない。

でもハヤテ君は年下の女の子に手を出すなんてことはしないわよね・

・・（多分）

そうハヤテを信じたヒナギクはナギの手を無理矢理引いてハヤテ達
と反対の方向へ向かつた。

ナギ

「おい！ヒナギク！何をするのだ！」

ヒナギク

「いいからーさ、楽しむわよー。」

不本意なナギを強引に引きずるヒナギクは振り向き、少しさびしそうな顔をし、その場を去つていった。ちなみに他のメンバーは・・・

泉・美希・理沙

泉

「いやあ、楽しかったね、ジェットコースターー！」

美希

「ああ、FU MAを上回る迫力だつたな！」

理沙

「よーし、次は・・・」

そして三人は次のアトラクションへ。

何もなくてすいません。（オチとか）

千桜・愛歌

この一人はゆっくりお茶してました。

千桜

「愛歌さん。さつきから何を・・・」

愛歌はジャブー力弱点帳を開いて何かかいていた。

愛歌

「いえ、ただいつでも人の弱みを握れるように整理を・・・」

スラッと笑顔で言った。しかもその笑顔がどこか黒い・・・

愛歌

「千桜さんはバイトのほうはいかがですか?」

千桜

「別に何もないんですが、三千院家の関係者にばれるんじゃないかな」と心配で・・・」

愛歌

「そうですか。なんにしても、バイトがんばってください。」

愛歌は笑顔（本当の意味で）でいった。

そんな愛歌に対して千桜は、

千桜

『愛歌さんは強いなあ・・・』

(体はよわいけどね。)

二人が会話していると一人の男が近づいてきた。

愛歌はそれに気付き、振り向くと、

愛歌

「あら、君は・・・」

ワタルだった。なぜか一人で行動している。

千桜

「あなたは確か、桂先生と一緒にや？」

当然の質問だが、

ワタル

「先生、知らない間にどうか行っちゃってさ、さがすの面倒だから一人でぶらぶらしてるんだ。」

ちなみに雪路は遊園地でものんだくれてます。

ワタル

「さすがに、一人なのも暇だから、『』一緒に緒させてもうつよ。」

ワタルは愛歌の隣に座った。

愛歌

「ええ、構いませんよ。」

愛歌も千桜も了承した。

愛歌

「とこりでワタル君？彼女（伊澄）とはどう？』

ワタル

「な！べべ別に何もねえよ！」

愛歌の質問にあたふたしまくるワタル。

そんな一人を見て、千桜は、

千桜

「かわいそに・・・・・あれ？」

一度はワタルに同情したが千桜は気付いた。

千桜

『愛歌さん、なんか黒くない・・・といつより本当に楽しそう。』

仲良く？会話するワタルと愛歌を見て、そんなことを思った千桜だった。

ハヤテ・伊澄

二人は次のアトラクションに向かつて歩いて歩いていた。もちろん手を繋いで。

ハヤテ

「伊澄さん。疲れたりしてませんか？」

ハヤテが心配そうに聞くと、

伊澄

「いえ、大丈夫です。」

会話がはずんでいない！

そんな一人に立ち塞がる新たなアトラクションとは？

第七話・それぞれのグループにて（後書き）

ご意見・感想待つてます。

第八話・おばけ騒動（前書き）

試験勉強で書く暇がなかつたので投稿が遅れてしまふせんでした。
小説、お楽しみください。

第八話・おばけ騒動

ハヤテと伊澄がたどり着いたアトラクション、それは・・・

『お化け屋敷』

ハヤテ

『えーとっ・・・』

ハヤテ困った。すごく困った。頭をかかえるくらい困った。

今ハヤテの隣にいる伊澄、彼女はゴーストスイーパーのプロフェッショナル。

そんな彼女がお化け屋敷なんていう子供だましに興味をもつだらうか?いや、もつはずがない。そうハヤテは思った。

ハヤテはとつあえず別のアトラクションに行こうと伊澄の手を引いた。

ハヤテ

「伊澄さん、あつひでひつとおもしろいアトラクションがあるみたいですね。」

伊澄の手を引こうとするハヤテだが、

伊澄

「ハハ、おもしろいですね・・・」

伊澄がお化け屋敷を描きして言った。

ハヤテ

『えーーー！？マジっすか！？』

ハヤテは心の中でつっこんだ。

ハヤテ

「えーと、伊澄さん？お化け屋敷ついていつの話ですね、別に本物の

おばけが出るわけではなくてですね・・・

ハヤテは必死に説得してみるが、

伊澄

「でもおもろいんです。」

伊澄の目がキラキラ輝いている。

ハヤテも仕方なく伊澄をお化け屋敷に連れて行った。

その近くをナギ・ヒナギク組が通った。
つこさつき別れたばかり、つていうツッコミは置いといて。

ナギ

「むー！ハヤテと伊澄！まだ手を繋いであるなー！」

ナギのダークサイドはまさに広がる。手に持っていたジュース缶を握り潰した。
ナギってけっこつ握手力あるんだなあ・・・

ヒナギクは最初よりは冷静だが、やつぱり落ち着かなかつた。

ヒナギク

『ハヤテ君のバカ・・・』

ナギはいてもたつてもいれなくなつて

ナギ

「ええーい！ やつぱり気になるから後をつけよつーー！」

ヒナギク

「あ、ちよつ、ナギ！？」

ヒナギクはナギを止めようとするが猛進するナギは止まらない。ずかずかと歩いていくナギ。それを追いかけるヒナギク。その二人が見たもの、それは・・・

『お化け屋敷』とかかれた看板。

ハハハハハハハハ

ナギ・・・暗い所が苦手

ヒナギク・・・高所恐怖症＆おばけ関係苦手

（・・・（汗））

軽くひきつる顔。

ナギ

「・・・あつちのアトラクションもじめじめひだな。」

ヒナギク

「奇遇ね、私も今そう思ったわ。」

お化け屋敷をスルーして遠い田をする一人。

まあ、なんだかんだでお化け屋敷終了。

ハヤテ

「いやいや作者さん……これだけですか！？」

隣で伊澄が「クククとうなづいている。ハヤテ
「いやいやシカトしないでくださいよ……これじゃ あお化け屋敷で
は何もなかつたみたいにしないでしょ……？」

何もなかつたんじゅね?

ハヤテ

「ありましたよー。お化け屋敷に入ると本物のおばけや悪霊ができるて、それを僕と角さんで協力して退治したんじょーーー。」

あ、わざわざ説明、苦労。

ハヤテ

「えー?」

いやね、お化け屋敷つてネタでもうパターンバレバレかなって思ってさ。ていうか、私はバトル描写を小説にするのが苦手だし。

ハヤテ

「めりませんじゃないですか・・・」

とまあ、なんだかんだでけつこいつ時間がたちました。

ハヤテ・伊澄

「・・・」

その頃、生徒会三人組は・・・

泉

「いやーレアな動画がとれたねえ！」

美希

「ああ。SF映画をも凌ぐ超絶バトル動画がどれたな。」

理沙

「まさかこんな動画がとれるとほなー！」

理沙はビデオカメラを持つてニヤリと笑う。

偶然生徒会三人組はお化け屋敷の中にいて、ハヤテと伊澄のおばけ退治するところに遭遇していた。そしてその様子をビデオにおさめていた。

美希

「しかし、鷺ノ富家のお嬢様にはあんな力があつたとはな・・・」

美希の発言に泉と理沙はコクコクとうなずく。

泉

「さて、すごい動画もとれたことだし、遊びにいこつか！」

理沙

「ああ、そうだな。」

三人組はアトラクションへ向かおうとしたとき、

ドカッ

理沙が誰かにぶつかった。サングラスにマスクをつけ、厚手のコートを着た人だ。（べただなあ・・・）

理沙

「あ、すいません！」

理沙が謝ると、

？？

「いえ、いらっしゃるや・・・」

妙にこもつた声だった。

その人は謝つてすぐにどこかへ行つてしまつた。

怪しいと思つた理沙がフツと氣付いた。

理沙

「のあああー！……私のカメラがー！！」

泉

「どうしたの、理沙ちん！！」

美希

「まさかカメラを盗まれたのかー！？」

と、心配する二人だが、

理沙

「・・・新しくなってる。」

泉・美希

「？」

そう。確かにカメラは盗まれたのだが、そのかわりにさらに高機能付きのカメラが理沙の手にはあった。

理沙

「・・・なんだつたんだ？」

生徒会三人組は首を傾げた。

そしてそこから少し離れたところに、

？？

「ふうー。めったにお姉ちゃんは忙しいなあ。」

サングラスとマスクをとり、コートを脱ぎ捨てた。

咲夜

「まあ、伊澄さんのこと（特別な力のこと）、ナギにばれくんようにするのも一苦労やわ・・・」

そう、理沙にぶつかつたのは咲夜だった。三人組の撮影を目撃し、動画の隠滅をはかったのだ。

咲夜は伊澄の特別な力のことを知つていて、伊澄はナギには力のことを見られたくないことも知つていた。

咲夜はナギと伊澄のお姉ちゃん的存在。一人ために苦労してるのだ。

咲夜

「これは貸しにしどくで、伊澄さん。」

そつづぶやくと咲夜はマリアのもとへ戻つていった。

そんなことをまったく知らないハヤテと伊澄は次のアトラクションへむかっていた。もちろん手を繋いで。

ハヤテ

「さつきは大変でしたね。」

伊澄

「いえ、仕方ありませんよ。それに仕事ですし・・・」

まあこんな感じでテンションの低いようなそうでないような会話している二人。

そんな一人がたどり着いたのは・・・

第八話・おばけ騒動（後書き）

感想待つてます。

第九話・好きな人・大切なものの（前書き）

またまた投稿が遅れてすいません。次回が最後になりそうです。

第九話・好きな人・大切なもの

ハヤテと伊澄がたどり着いたアトラクション、それは・・・・・

観
覧
車。

・・・べただなあ、展開。

ハヤテ

「伊澄さん、もう時間ありませんし、これを最後にしますか。」

ハヤテは伊澄に提案する。

伊澄

「はい、ハヤテ様がそういうなら・・・」

承諾する伊澄。

そして二人は観覧車に乗るため、行列にならんだ。

そしてここでも、

ナギ

「あ、ハヤテと伊澄ー。」

またがよーー ストーキングしてないんじゃねえのかよーー。

ナギ

「あの観覧車に乗るつもりなのか?よし、私達ものるぞー!」

意気込むナギ。 対して、

ヒナギク

「・・・ナ、ナギ。 もももひやめるつて、いい言つたでしょ。 だ、だから観覧車は・・・」

動搖しまくるヒナギク。 この子の高所恐怖症は相当なものですね。

ナギ

「つるさいー私はいくぞー！ヒナギクは来なくていいぞー！」

ヒナギク

「そろはいかないわよー！あなたを野放しするとどうなるかわからな
いわー私もいくー！」

ヒナギクのアビリティー発動！！

生徒会長としてのプライド&ハヤテのことが気になる&負けず嫌い

二人も行列に直行！！

こうして、ハヤテと伊澄がまず観覧車に乗り、その次にナギとヒナ

ギクが乗つた。

・・・てか、ナギとヒナ、ギクが次つてことはハヤテ達のすぐ後ろに
いたつてことじやん！－

氣付くだろ！－普通！－

はい、作者が自分の文章につつこんだといふので、

ハヤテ

「いい眺めですね、伊澄さん。」

笑顔で言うハヤテ。

伊澄

「ええ、そうですね・・・・・・・・ハヤテ様。その、さすがに観覧車の中では・・・その・・・」

そう。ハヤテはまだ手を繋いでいた。まるで恋人のよう・・・

ハヤテ

「あ、そうでしたね。すいません。」

そういうとハヤテは伊澄の手を離す。

伊澄は離した手を見ていた。

伊澄

『どのくらいハヤテ様と手を繋いでいたんでしょう?』

そんなことを考えながら伊澄の顔は赤くなっていた。

視点が変わつて、ナギとヒナギク。

ナギはハヤテ達の方を気にしているが、その隣でヒナギクはぶるふると震えている。

カクカクカクカクッ

ヒナギクのビビリよつは尋常じゃなかつた。

ナギ

「むーー！いつたいあつちは何を話しておるのだ！？ってヒナギク、おまえは何をしている？」

ヒナギク

「べべべべべ別に……何にも……」

声が裏返つていた。

ナギ

「仕方ない。こんなこともあらつかとハヤテの執事服に盗聴器を仕

掛けでおいた。」

ヒナギク

「あんたなんでもありね・・・」

ヒナギクは呆れ顔で言うが、内心ナイスと思った。

ナギは周波数を合わせようとする。

・・・ガガツ・・・ピー・・・

ハヤテ

「・・・伊澄さ・・・好きな・・・いるん・・・」

ナギ

「むー聞こえてきたぞー!」

ヒナギク

「なんて会話してる?」

ナギ

「つむ、多分好きな人の話ではないか?」

ヒナギク

「え！？」「

思わず立ち上がるヒナギク。だがその反動で観覧車のゴンドラが揺れる。

再び座つて怯えだすヒナギク。

ナギ

「お、伊澄がなんか話しだしたぞ！」

・・・ガガツ・・・ピー

伊澄

「ハヤテ様・・・好きな人・・・いるんですか？」

ナギ・ヒナギク

「！？」「

耳を大きくする一人。

ナギ

『い、伊澄のやつ、なんて大胆発言を！－！だがハヤテは私にラブラ

「ブなはずだ！－やはり伊澄はまだハヤテのことを…？」

ヒナギク

『は、ははハヤテ君のすすす好きな人…？気になるけど聞きたくないような…・でも聞きたい…！』

あれこれ悩むナギ。顔を真っ赤にしてその場でもがいでいるヒナギク。

しばらくして我に返る一人は再び聞き耳をたてる。

周波数を合わせるナギ。

ハヤテ

「好きな人…ですか？そうですねえ…今の僕には女の子と付き合う資格はありませんから、好きな人なんて…」

それを聞いたナギとヒナギクは、

ナギ

『ハヤテめ、伊澄を傷つけないようつまべじまかしたな。』

ヒナギク

『ハヤテ君らしいわね。』

一波乱起きるかと思われたがなんとかなった。

・・・・・が！

ハヤテ

「伊澄さんには好きな人いないんですか？」

ナギ・ヒナギク

「は？」

ナギ

『「このマヌケ！…伊澄はおまえのことが…！」』

ヒナギク

『ハヤテ君、やつぱりロリコンなのかしら…・・・』

鈍感君の一言が状況をさらに複雑なものにした。ハヤテの質問にたいして伊澄は

伊澄
「・・・いますよ。」

ハヤテ

「どんな人ですか？」

ハヤテも笑顔をかえした。

伊澄

「私の大切なものの（ナギ）を命懸けで守つてくれる人です・・・」

伊澄は笑顔で言った。

ハヤテ

「素敵ですね。」

一方、これを聞いたナギは盗聴をやめた。その時のナギはどこか嬉しそうな顔をしていた。

第十話・一日の終わりに・・・

観覧車を乗り終えたハヤテと伊澄（加えナギとヒナギク）。もつ帰る時間なので集合場所に向かう一人（後ろから一人）。

ハヤテ

「今日一日、楽しめましたか？伊澄さん・・・」

伊澄
「はい、ハヤテ様のおかげで・・・」

伊澄は少し顔を赤くしながらも笑顔で答えた。言い忘れたが一人はまた手を繋いでいます。

ハヤテ

「いえいえ、三千院家執事として当然のこととしたままですー！」

その言葉を聞いた伊澄は急に真剣な表情になった。

伊澄

「ハヤテ様。これからもナギの執事として・・・ナギのヒーローとしてナギを守つてあげてください。」

ハヤテは伊澄の真剣な表情に思わず、

ハヤテ

「あ、はい・・・」

とひやんと返答できなかつた。

伊澄

「そ、それに私は・・・ハヤテ様のヒロインに相応しくありませんから・・・」

つい弾みでボソッと言つてしまつた伊澄。自分の言つたことを直覚して顔が赤くなつてこゐ。

ハヤテ

「?」

言つてゐる意味がよく理解できないハヤテ。

あからりそのままに冷める空氣。

ハヤテ

『い、いかん…さつさまではいい空氣だつたのに・・・もしかして

伊澄に嫌われるよつなことしたのか！？いやしたかもしけない！
いや、したに違いない！－『

心中で必死にこなことを考え、悩むハヤテ。
するとハヤテはこの雰囲気を変える方法を思いついた。その方法と
は・・・

ハヤテ
「伊澄さん！・・・

僕のヒロインになってくれませんか？・・・

しばじ沈黙・・・

伊澄

「…………？」

伊澄はこれまでにないくらい顔が赤くなり、顔から蒸気が出ている。遠回しに告白しているようなセリフだが、ハヤテはまったくそんなつもりはまったくない。

むしろ、ハヤテは誤解をして、

ハヤテ

『いかん！！何か間違えたか？よし、言い方を変えて……』

(鈍感というよりバカではないのか?)

ハヤテ

「伊澄さん……」

僕、貴女だけのヒーローになつてもよろしいですか?」

伊澄

「オロオロ・・・プシュー・・・バタツ」

顔を赤くしてオロオロするも、恥ずかしさのあまり顔から蒸氣を出しどうとう氣絶! ! とこう動作を声にだして言ひ伊澄。ドリマリロみたいなオチ。

ハヤテ

「ちよつ、伊澄さん! - どうしました! - ?」

氣絶している伊澄をお姫様抱っこするハヤテ。ハヤテはとりあえず近くのベンチに向かつた。

しばらくして、伊澄は目を覚ます。目を開けるとすぐそこにはハヤテの顔があった。

伊澄

「ハヤテ……様？」

ハヤテ

「よかつた！伊澄さん、急に倒れるんで、どうしたのかと。」

(この鈍感君が原因だけね。)

心配だったハヤテは笑顔になつた。

対して伊澄は恥ずかしがつてゐる。なぜならハヤテがひざ枕をして
いるから。伊澄がひざ枕をされてゐる姿を想像できませんが。

伊澄

「ハヤテ様……もう大丈夫です……」

少し残念に思つも起き上がる伊澄。

伊澄

「あの……ハヤテ様。さつきの……あれは……その……」

ハヤテ

「？　ああ、やつなのですか？本気ですよ。」

あらためて驚く伊澄。

そしてハヤテは伊澄の手を強く握った。

ハヤテ

「僕は伊澄さんのこと、命にかえてもお守りますよ。」

伊澄

「・・・ハヤテ様・・・」

伊澄の顔は赤いが、嬉しそうな表情だった。
しかし、

ハヤテ

『伊澄さんはお嬢様の親友。伊澄さんに何かあればお嬢様は心配するに違いない！なんとしてもお守りしなくてはー』

とまあ、ハヤテは相変わらずです。

End

とはいかなくて、

ナギ・ヒナギク

「ハヤテ（想）—————！」

この世のものとは思えない怒りに満ち溢れた怒鳴り声が響きわたった。

ハヤテ

「お、お嬢様！？ヒナギクさん…？」

ハヤテは何が何だかわからないがナギとヒナギクの周りにはダークサイドが広がっていた。一人はこれまでの一部始終を見ていた。どこをどう聞いても告白にしか聞こえないハヤテのセリフに嫉妬心が爆発したのだった。

ナギ

「ハヤテ！！！伊澄に手を出すとは・・・この浮氣者が！？！」

ヒナギク

「ハヤテ君！……あなたって人は……変態……ロリコン……」

ドッカーン！……！

ナギとヒナギクの怒りが爆発した音

ハヤテ

「ちょっと、二人と『ゴフツ！』

ナギのアッパーが破裂！

舞い上がったハヤテを中心に等間隔で構える二人。

ナギ

「いくぞ、ヒナギク！……」

ヒナギク

「いつでもOKよ！……」

二人は同時に駆け出し、ラリアットをする。
そして、

ナギ

「クロ・ンバー！！！」

ハヤテの首は一人の強烈なラリアットで挟まれた。
ハヤテは窒息死寸前！

というわけで借金執事ことハヤテはいつも通り不幸に終わった。

ちなみにそれを遠くで見守る人は、

伊澄

「ハヤテ様が・・・オロオロ・・・」

ハヤテを心配する伊澄。その後ろから

咲夜

「あーあ、やっぱりこういうオチかいな・・・」

「マリア

「まあ、それがハヤテ君のクオリティですかからね。」

咲夜、マリア登場。

伊澄

「あら、咲夜。マコアさんも。どうして？」

咲夜

「あんたらが心配で来てやつたんぢゃね。それより伊澄さん。わつきへ
ヤテ向むつたんぢゃ？」

マリア

「そりそり私も気がなってて……」

伊澄に質問する一人。

伊澄

「それは……今は言えません。」

咲夜・マリア

「？」

伊澄

『ハヤテ様。やっぱり私はあなたのことが

大好きです・・・。

一日の終わりを告げる夕焼けを見ながら、少女一人は心の中でそう
いました。

E n d

第十話・一田の終わらつこ・・・(後書き)

みやびやく完結です。読んでくださった方々、本当にありがとうございました! 次のはいまとこの決まりませんので、何とも言えません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4444d/>

ハヤテのごとく！アナザーストーリー『レクリエーション』

2010年10月9日03時27分発行